

歴史における「知」の機能

—18世紀フランスの匿名地下文書

『三人の詐欺師たち』¹⁾を手掛かりに—

豊 田 剛

歴史とは何であろうか。殊更むつかしく考えたりしない人にとっては、時間の経過するうちにいろいろの出来事が起こることそのものを指すと思われる。といっても人間に直接関わらない自然現象などは別である。火山の噴火といったことも一つの出来事ではあるが、それが人間の生き方に関わる場合にのみ歴史の対象となる。その意味で自然史などは、ここで問題とする歴史の対象にはならない。従って一般的に言って、歴史とは人間の行為の織りなす出来事の連なり、過去において人間によって引き起こされた出来事の総体と考えられているようである。たしかにこれはこれで一つの考え方ではあるが、勿論そこには大きな問題がある。つまり我々が問題にするのは既に過去に生じた事柄であるのに、それを問題にする我々は今ここに生きている人間だということである。しかし考えてもみよう。今という時間に生きる我々がどうして既に起ってしまった出来事を「知る」ことができるのか。過去に起こったことはいまでもなく今はもうない。当然それを直接「知る」術は我々にはない。超能力によって昔起った出来事をありありと思い浮かべることのできる人がいるとは到底思えない。仮にそう言い張る人がいたとしても、それが本当かどうか確かめようがない。今も人間に関わる出来事が相変らず起っていることは確かなので、それに似たことが過去にも起っていたであろうと推測することは困難ではない。しかしタイムスリップして過去の世界に行くことができない以上、我々にできるのはどういことが起ったのか「想像」し、「推測」することだけである。「タイムマシン」で過去に遡るといった話がS.F.の世界にはよくあるが、それだと過去はなくなったのではなく、次元を異にしてそのままどこかに

保存されていることになる。そうなるとその「過去」と「現在」の関係をどう説明するか、という解答不能の大問題が発生する。そんなことがありうるとはとうてい考えられないのである。)

「想像」といっても、ただ闇雲に好き勝手に起ったであろうことを思い浮かべることではない。なぜならそれは脳がでっちあげる妄想、文字通り Hirngespinnst にしかならないからである。生起した事柄がどのように起ったであろうかを出来るだけ忠実に再現する努力が求められる。ところで何かが起こったことは確かでも、それを「知る」人が誰一人いないと、それが起ったという事実すら知られることなく闇に埋もれてしまう。それなら実際に起ったことでも、起らなかったのと何も変わらないことになる。たとえば土中に埋った土器があるとして、誰もその存在を知らなければ、それでもそれは「ある」といえるのだろうか。それはともかく過去に起ったであろう事実は人間の想像力によって再構成される以外に復元の道はない。勿論その復元はレプリカであって本物の事実でないことは断るまでもない。

そこで我々は想像力による出来事の再構成を試みるわけだが、その際どうしても避けられない制約があることを意識せざるをえない。つまり我々の思考力を駆使する際に、どうしても必要な材料が欠かせないということである。材料もないのにただ頭の中だけで思考を徒に空転させ、それであたかも本当の認識が成立しているかのよう錯覚する傾きが人間にはある。それは『純粹理性批判』『弁証論』でカントが見事に指摘したことである。

ではその材料とは何か。それは広く考古学的資料も含めて、記録された資料と考えるしかあるまい。といっても過去に起った出来事の大部分は記録されることすらないであろう。無数の出来事が次々起ったとしても、そのほとんどは記録もされず闇の彼方に消え去ってしまうものにちがいない。人間の営みの大部分が、いつの時代にあっても、特に記録されることもなく忘却のうちに沈んでゆくというのが歴史の定めだといっても過言ではあるまい。考えることもできないほど膨大な量の記録に残らない事実の数々と、そのうちごくごくわずかに残される記録との比較を絶したアンバランスに思いを馳せないではいられな

い。

従って歴史を人間に関わる出来事の総体だと考えると、そのほとんどが我々には知られないものに留まるしかない。それは、あたかもカントの「物自体」のように、我々には知りえない部分（基体）だからである。そうすると我々が歴史という場合、たまたま記録に残された何らかの資料を元にして、こういうことがあったろうと思ひ起こし、それを想像力で復元し再構成したものと解するしかないことになる。その意味で歴史とは歴史を考える人間の頭の中で作りあげられた一つの像にすぎず、人間の頭脳の作りあげる観念（産物）以上のものではありえない。当然のこととして歴史を考える人間がどんな考え方、感じ方をする人間かに応じて、作り出される歴史像も千差万別となる。極端に言えば歴史とはそれを考える人間の頭の中にしかないし、それを考える人間の数だけ歴史があるということである。従って誰が見ても正しいと思われるような「客観的」な歴史などというものは元々存在しようがないといえる。結局我々にできるのは、たまたま幸運にも残された資料（その資料も戦乱、災害、事故等で失われることが少なくない）を分析して、それによって一定の歴史像を作り上げ想像することだけなのである。それならそこで提出される歴史像が人間の思考というフィルターを通して作りあげられるものである以上、それを考える人のバイアスがかかることは避けられない。だからこそ全く同じ事柄をとりあげていながら、人によって全く別の歴史像ができあがるのである。同じ人間が良く描かれたり悪く描かれたりする事態は決して珍しくない。そう考えると、一般的に歴史の真実だと何となく思いこまれ信じられている事柄はたくさんあっても、それが本当に真実であるとは限らないことがありうる。否、むしろ疑ってかからねばならないことの方が多いのではあるまいか。カエサルではないが、人間はどうしても信じたいことを信じるものだからである。それを記述する人間がどういう人間か、どんな考え方をする人か、どんな育ち方をし、どんな社会で生きてきたのか、それらすべてが歴史の描き方に大きな影響を及ぼさずに済む筈がないのである。

しかも記録として残っている資料が信用に値するかどうかという問題もあ

る。人間の第一の特徴は「嘘をつく動物」であると冗談ではなく言えるほどだからである。全くの嘘があたかも真実であるかのように書き残されることも決して稀ではない。自分の都合のいいように自己正当化をはかるのは人間の常だからである。全く事実と異なることを、あるいはその正反対を事実であるかのように書く例などいくらでもある。従って書き残されていることをそのまま鵜呑みにするようでは、とても歴史の真実に迫ることなどおぼつかない。また歴史の通説とされているようなことでも、時には眉に唾を塗ってかかる必要がある。一般に受け入れられやすい見方が正しいとは限らないし、わかりやすいこと、自分に納得しやすいこと、単純化されたことを好む傾向が人間にはたしかにあるからである。どんな人間も自らの体質や育ってきた社会環境による限定を免れることはできず、その人の世界観、価値観の形成もその被限定性をのがれることはできない。このことは歴史の記述を試みる者も、自らの思考が実は既に歴史的に限定されているという事実を無視するわけにはいかないことを意味する。思考がいかにも「自由」だ「自発的」だと強調してみたところで、我々のものの見方、考え方が社会的に限定されたものであることは否定しようがないからである。歴史的に限定を受けた者が歴史を分析、記述しようとするのだから、そこにA・スミスのいう「公平な観察者」の立場を期待することはむづかしい。誰が歴史の記述者であれ、この限界を超えることはできない。その意味で書き残された資料に頼らざるをえない歴史記述の限界は明白である。従って柳田國男が文書による資料をあてにしない態度を重視したことはよくわかる主張である。ほとんど大多数の人間が文書で記録を残したり、その記録の中に名をとどめたりすることはないからである。しかしそういう人々の生活も誰かが記録として書き残さないと全く知られないままになる。

当然のことだが、誰でも記録を残せるわけではない。それができるのはその社会の中でもほんの一握りにすぎない。記録に残るのも、記録を残せるのもごく限られた人たちだけであろう。記録することができる立場に立つことは一つの特権と考えるしかないからである。まず記録を残せるということということ自体、その社会のごくごく一部の者でしかなく、もっとはっきりいえばそれは支

配層に属していなければほとんどなしえない事柄に属する。まずものを書き残すという能力を具えた者にしかそれは可能ではない。その能力を得るためには何らかの形で支配層につながっている必要がある。そこで求められるのはものを書き残せるだけの「知」的能力であるが、それを獲得するためには、必要な教育を受けられるだけの経済的裏付けがある。それが支配層に属するという事である。そこに直接属してなくとも、そこから必要な援助を受けられる状態にある事である。富裕な者が、能力がありながら貧困ゆえ勉学の機会を奪われている者に、奨学の資を与えることは昔からよくあった事である。教会で牧師をつとめる者などには、そういう境遇の者が少なくなかったと思われる。そしてそういう者たちがたいい体制を擁護し、正当化する役目を担うようになるのは理の当然である。そのことから少なくともいえることは、「知」が支配のための有効な手段として機能するという事、また歴史的に機能してきたという事である。

実際問題として昔から出来事を記録として書き残す作業はなされてきた。文字が発明される前には、伝説にせよ神話にせよ、音声言語によって人から人へと口承の形で伝えられるしかなかった。それらも文字にされないで後世に残るのは難しかったであろう。単に記憶内容を口づてに伝達するというだけなら、文字によるほどはっきりとは伝わらず、また残らないものである。文字の発明は事柄の記録を可能にする画期的な出来事だった。勿論そこには文字だけでなく、絵や図表、数字による記録なども含まれる。それらによって昔からいろいろなことが記録されてきたことは確かである。人間には生来何かを記録に残しておきたいという欲求のようなものがあるのだろうか。それはともかく何のためにこういう作業はなされるのだろうか。つまり何かを歴史的事実として記録し書き残すことは何を旨とした行為なのだろうか。それを考えてみる必要がある。

いろいろの目的が考えられる。畢竟死を免れない人間が、自分が存在していたことすら忘れられてしまうことを憂え、何か自分が生きてきた証を残したいと願う気持ちになることは理解できる。たとえ本人は消え去っていても、それ

を記録するものは、記憶を呼び起こすものとして、後の世にまで残ると。(それが残ろうが残るまいが本人自身にはもはや何の関係もないのだが。)これは自分の生きてきた時間を未来にまで延長したいと希う空しい試みのように見えて、それでいて今生きている自分を満足させることになる涙ぐましい努力といえるのではあるまいか。事実を記録として残し、忘却の淵から救いたいという意図以外の目的もある。たとえばタキトゥスは「歴史記述の最も重要な任務は、美德(virtus)を闇から闇に葬らないこと、それとともによこしまな言行を書きとめて、死後の汚名(infamia)に対して、人々が恐れをいだくようにすること」である(『年代記』第三巻65)といている。ここには歴史記述の効用として後世の人間の道徳的教化に資するという目的が語られている。人間は過去から学ぶことで、今をよく生きることができるということである。ただタキトゥスは歴史的事実を正確に記すことは可能だと楽観的に考えていたらしく、歴史を「怨恨も党派心もなく述べてみたい。私にはそういう感情をいだく動機は全くないのだから。」(同第一巻1)と書いている。たしかに私的感情による好悪に左右されたり、事実を振り曲げ歪曲したりしないことはプリンシプルとして必要である。しかしそれを守っているからといって、客観的で間違いのない記述が可能になるとは限らない。いくら公正に事実をありのまま記述しているつもりでも、記述者の主観に依拠する部分をなくすことはできないからである。従ってくり返すまでもなく、誰の目からみても客観的で正当な記述などというものは元来ありえないのである。しかし上記以外にもっと重視せざるをえない目的がある。それには我国の『日本書紀』や『古事記』などを思いうかべてみればよい。それがそのまま生じたことの忠実な記述であるわけではない。大半が嘘というわけではあるまいが、そこには嘘も創作も虚構もまた事実の隠蔽も多々含まれているだろう。それが天皇制権力支配体制の正当化を狙ったものであることは紛れもない。体制の支配者がその体制が正当なものであること、自分たちのやっていることは正しいことだと自己正当化をはかるのは、いつの時代にもどこにでもありふれた事柄にすぎない。血で血を洗うような凄惨な権力闘争は珍しくないし、社会というものにそういう争いは付きもの

であろう。しかし体制維持に成功した権力者たちは、自分たちのやっていることやったことは正しいことだと正当化し、美化して描きたがるものである。どんなに悪辣な狡猾な極悪非道な手段で勝利を取めたのであっても、結果がすべてで「勝てば官軍」とばかり、それが正当化される。勝ったから正しいとされているにすぎないのに、それが正しいから勝ったのだと論理のすりかえが行われる。ここにも「知」の巧妙な利用の例が見られる。歴史記述の目的としてのこの面は決して過小評価されてはならない。

歴史記述の目的は何であれ、その際大事なのは資料をどう読むかということである。読み方次第でどのような歴史を描くことも可能になるからである。歴史とは、生起した事柄がどのようなものであれ、それをどう見るかという人間の見方によって作り出され描き出される「物語」にすぎない。またどう見るかという見方は千差万別である。百人いれば百の歴史が描かれてもおかしくない。資料の読み方次第では真逆の歴史が十分成り立ちうる。

となると全くニュートラルな客観的歴史などといったものはありえないから、歴史を描こうとする者の持つ視点、問題意識が肝要となる。それは何を中心軸にすえて考えるかということである。我々は当然対象とする「社会」のあり方を問題にせざるをえないが、その「社会」を分析するにあたって何を中心に考えればいいのか。それは歴史貫徹的に「社会」をつらぬくような基準でなければならぬ。それを我々は「支配」という概念に求めたい。「支配・被支配」という枠組みは、どんな「社会」にも例外なく見られる基本構造だと考えられるからである。この「支配」という関係は必ずしも固定したものと考えるはずで、むしろ流動的なものと把えるべきである。というのも支配される立場の者はたえず支配する者の側に食い込もうと努めるからであり、そこにはたえず緊張関係が生じないではないからである。そこには様々の権力闘争も当然発生する。その「社会」において優位な支配的地位にいる者は、当たり前だが、その「社会」のあり方をそのまま維持しようと努めるだろう。それは現状をそのまま保守しようとする力として働くであろうが、その力の行使を「正義」と称するのが支配する側の常套手段である。支配する側にとって都合のい

い見方が「正しい」とされるのである。そしてそういう見方にお墨つきを与える役目を演じる者が求められる。それが所謂「知識人」なのである。その意味で「知」が支配の最も有効な道具として機能するものであることがここでも確認できる。

「知」が支配の道具であるということは、特に昔にさかのぼらなくても、今のいわゆる「学歴社会」を思いうかべるだけでも容易にわかることではないか。入試の成績で学生をふるい分けること、否それ以前にあらゆる学校教育そのものが何回もペーパーテストを繰り返して、学生に順位をつけ選別することを日常としている。そこで問題になっているのはたしかに「知」であるが、その「知」を我々はどう考えればいいのか、それが問われている。我々に課されているのは、そういう我々の目をひく道具や手段としての「知」を手がかりに、「知」というものの本質を歴史的文脈で掘り下げて考える事である。人間の選別のために利用される「知」は「社会」の中で出世していくために必要だと信じられている基準にすぎない。多くの人はその価値を疑っていないらしいことからみても、その「知」なるものが人間を測るための尺度としてけっこう有効だと信じられていることは確かである。偏差値秀才など実際あまり役には立たないという指摘がしばしばなされても、今だに学歴信仰、有名大学信仰は衰えることなく健在のようである。ここでの「知」がいわゆる事柄の真理という意味での「知」とはずい分違ったものであることはよくわかるが、それでもそういう「知」が人間同士の競争の尺度にされているという現実は紛れもなくあることは認めないわけにはいかない。

支配の手段としての「知」に翻弄され、それに隷属しているのが我々の現状だとすれば、それを打破するにはどうすればいいのか。偽りの「知」が充ちているこの世の中では、まずその「知」が本物ではないことに気づくことから始めるしかない。そのためには、その中に何の疑問もなく安住してはならず、その「知」を相対化、対象化できる視点（より高次の基準）を獲得するしかない。世に波風を立てることを恐れず、それはおかしいのではないかと疑い、ものごとを深く考えることからしかそれは出てこない。今の教育はどう

やって学生に「考える力」をつけさせないでおくかに腐心しているように思えてならない。学校はいらぬことをせず放っておけば立派に成長するかもしれない者を、わざわざ手を加えダメにして「社会」に送り出すための装置と化しているのではないかと皮肉の一つもいいたくなる。支配にとって邪魔になること、余計なこと、を「考えない」ような「いい」人材を育成することが目指されているように見える。「社会」という機械の歯車になって文句もいわず従順に働らいてくれる人が「いい人」なのである。こうして人間は聞き分けのいい家畜に飼い馴らされる。偽りの「知」によって支配されていながら、その状況に満足して生きるよう強制される。体制に逆らうような不屈き者は許されない。厳しく弾圧されるか、もっと巧妙に真綿で首をしめるようにじわじわ圧迫されるかの違いはあっても、事情は変わらない。「世の中はこのままでいいんだ」「何も変らなくていいんだ」という方向にいつの間にか誘導されている。その点ではマスコミの洗脳も無視できないが、最も効果的な働きをするのが実は「宗教」なのである。それは「神を信じよ、疑うな」というが、「信じる」ことは思考停止の要求に他ならない。「信じよ」は「考えるな」と同義なのである。信心はいいことだと無邪気に信じて疑わない善人善女たち。世をあげて愚民化が遂行されていることに思いをはせるべきである。

「社会」がすべからく「支配・被支配」の構造で成り立っている限り、そこでは支配する側の立場からすると、支配される側の人間は「知」など全く持たないことが望ましい。昔から「民は愚かに保て」が支配者の大事なスローガンであり、最も重要な格率であったことは当然なのである。この体制、この社会のあり方はおかしい等ということを被支配者に思わせるようなら、その支配体制はうまくいっていないということなのである。だから被支配者には今のあり方が一番いいあり方なのだと思わせる必要がある。民は愚かであればあるほど支配者側にはけっこうなのである。従って「知」の独占をはじめ、民を愚かに保つための努力が昔から倦まずたゆまず続けられてきた事情はよくわかる。そこでは被支配者を「無知」の状態にとどめておくことが大事なのである。「宗教」がこれ以上ない重宝な支配の道具として体制維持機能をたえず果たし

てきたことは、古来より現在まで歴史を貫いて変ることなく続いて来た見間違いのような事実である。神の存在を信じることに基盤をおく「宗教」は当然の如く神の存在を自明の事実として前提する。始めに既に結論が出ているのである。ところが聖職者や学者の中には、ご丁寧にもその結論を「知」を用いて証明しようとする者まで現れる始末である。古くから「神の存在証明」なるものが数知れず試みられてきた。それほどわかりきった確かな事実ならわざわざ証明するまでないではないか、と半畳の一つも入れたくなる。

そもそも「神が存在する」ということは人間が「知識」として知ることができるような事柄なのであろうか。それは「神」をどういう存在として把えるかというその定義によって左右される。よくあるように「神」を全知、全能で、遍在する、慈悲深い存在だとしてみよう。それは人間の能力をはるかに超えた存在であろう。有限な能力しかない者が無限の能力を持つ者の存在を「知」ることができるのだろうか。人間の認識能力を超出したものを人間が認識できる筈はあるまい。とすると「神」は始めから人「知」の対象ではないことがわかる。人間がその存在を「証明」しようなどとしてできるような代物ではない。人知が人知を超えたとされるものを把えうるとするのは明白な矛盾であろう。だからこそ哲学史上アンセルムスを始めデカルト等々によって数多く試みられてきた「神の存在証明」なるものは奇異の念をいだかせずにはすまないのである。「証明」しなくても自明なことをわざわざ「証明」しようとするのはおかしい。このことははからずも「神の存在」が実は自明ではないということを目白していることになるのではないか。「神の存在証明」なるものがどれ一つとして成功していないのは、いわば当り前のことではないか。そんなものはじめから存在していないのだから。カントの慧眼はそれを喝破し、余すところなく示したということができる。つまりカントは「神の存在証明」なるものがすべて「証明」になっていないことを見事に指摘した。(ただしそれは「証明」に成功していないことを示したにすぎず、神の「非存在」を証明したわけではないというおまけつきである。それは理論的には断念せざるをえないことだが、実践という別の形で実現可能とするものであった。) いずれにせよ人知の対象

となりえない「神」なるものの存在を「証明」しようとする企て自体がそもそも自家撞着であることは否めない。にもかかわらずそういう試みが何度もくり返されてきたのは何故なのか考えてみる必要がある。

そこから見てとれるのは、「神など実は存在していないのだ」といった公序良俗に反する考えを持つ者がいては困る。そんな不屈きな輩はこの社会から駆逐せねばならないという発想である。そこに既に「神が存在する」と信じる「宗教」が、社会の構造を支え、秩序を維持、強化するための道具（イデオロギー）として機能していることが読みとれる。「宗教」は権力と一体化した支配的勢力として、常に体制維持に貢献するものであり、これは歴史を通して一貫してみられる事実である。

しかし翻って考えてみると、キリスト教やイスラムで信じられているような「神」が本当に存在するのだろうか。これは当然出てきていい疑問である。そしてもっと健全な思考力があれば、つまりまともな「知」的能力があれば、そんなものは実在しないという結論に至っても何ら不思議ではないのではないかと。もっとも歴史をふり返ってみると、無神論、唯物論が唾棄すべき思想として忌み嫌われ、人類の不倶戴天の敵のごとく目の敵にされ、迫害されてきた数多の実例にこと欠かないことに驚かされる。「宗教」が体制維持機能を果たすなら、それが反体制思想を弾圧するのは当然である。そして反体制に連なる恐れのある思想を抹殺するための効果的な武器をして「知」が重宝されるのである。「神」への信仰は「知」ではない筈なのに、おかしなことに「知」がその補強に利用されたりする。勿論こういう「知」はまともな「知」ではない。従ってそれがあたかも確かな「知」であるかのように言いくるめる必要があり、そのための努力が様々の手練手管を用いてたえずなされるのである。そしてみせかけの「知」が本物の「知」であるかのように厚かましくも主張される。（それはカントが「弁証論」で論駁したネガティブな意味の「形而上学」的主張に他ならない。）それがそれで食っている聖職者や学者といった知識人の大事な仕事であり、飯の種になっているのである。

昔から「神が人間を創った」とする神話のたぐいは世界中にある。しかしこ

れほど逆立ちした発想がまたとあろうか。いうまでもなく人間が「神」を創るのであって、決してその逆ではない。「神」は人間の頭脳や精神が生み出すフィクションにすぎない。自分で創った「神」を自分の外におき、それを信じることでそれに支配され、隷属することは正に立派な「疎外」に他ならない。

では人間はどうして「神」なるものを信じるのだろうか。勿論一般の人々は「神」が本当に存在するかなどということを厳密に考えた上で信じるわけではない。彼らにはしっかりした思考力が身につけていないので、いわれていることの当否を正確に判断する能力がないことが多い。従って間違っただけを簡単に信じたり、迷信にとらわれたりすることが少なくない。「知」などより「信」が先にあるのであって、信じることで心が安定するならそれで十分なのである。プラグマティズムの主張する通り、「神」が本当に存在していても、また存在していなくても、それを信じることで安心できるなら、それはそれで十分な効用を持つ。この心理的平安の要求は決して過小評価されてはならない意義を持つ。誰でも心安んじて人生を送りたいのは変らないからだ。ただ問題はそれが個人の心の問題だけにとどまらない点にある。いうまでもなく人間は「社会的存在」である。一人孤立して生きていけるわけではない。個人の心の問題は、とりもなおさず、その個人の生きている「社会」の問題に繋がらざるをえない。個人の問題はその個人の集合体である「社会」の問題に直結するからである。そこに「宗教」の要がある。一人の人間が何かを信じるだけでは全く「宗教」ではない。それが数人になっても事情は変らない。同じことを信じる人間が一定数以上集まらないと、つまり「組織」をなさないで、それは「宗教」とは呼べない。逆にいえば「宗教」が権力を持ち影響力を示しうるためには、「組織」化は不可欠なのである。人間の集合体としての「組織」はそれ自身の論理をもって動く。それは「宗教」の場合も「世俗」の場合も何ら変りはない。「組織」は有機体に似て、自らを維持するだけでなく、拡大、発展してより大きな存在になろうとする。それは支配関係や権力闘争と無縁ではありえない。いくら個人の思想は自由だと強弁してみても、組織に属する限り、組織の論理が個の意志に優先することは避けられない。そこでも実は「知」が

重要な役割を果たすのである。個人と同様組織も自らの言行が正しいと常に正当化をはかるものである。そのために「知」が利用される。勿論その正当化が妥当なものであることは少なく、むしろとんでもないこじつけであることも多い。しかし「知」を装うことで、それに慣れていない者を丸めこむことは容易なのである。「知」は組織による支配構造の正当化に援用されるだけにとどまらない。その組織内での権力闘争を優位にすすめるための手段としても駆使される。このようにして「知」が支配の原理として機能し、歴史を動かす力として働きつづけてきた事実を我々は確認せざるをえないのである。「支配・被支配」の構造はたいてい少数の支配者と多数の被支配者からなる。そこで弱い側つまり支配される側が不満を持ち現状の改善を要求するのは当然である。その要求が満たされ改善が実現されてこそ我々は歴史の進歩を云々できよう。権力を持った支配側が現状をそのまま維持強化するために「知」を最大限に利用し、多数の者を「無知」のうちにとどめおこうと画策するものであることはよくわかっている。それをどう打破するか。多くの者が「真実」に目醒め、本物の「知」を手に入れるしかない。もっとわかりやすくいえば「賢くなる」しかない。それは既に「啓蒙」という思想においてとっくに説かれていたことである。それに対する妨害をどうはねのけるか。どうしてこれまで「啓蒙」がうまく成就しなかったのか。それを考えるための材料とし『三人の詐欺師たち』をとりあげ考えてみよう。

密かに回覧されていたと思われるこの危険な地下文書には、その流通過程でかなり多くの追加や変更がなされたことがわかっている。しかしいちいちそれに触れるのも煩雑なだけであるので、ここではテキストクリティークの問題にあまり深入りすることは控えたい。従って、以下、6つの部分からなるこの文書の梗概を述べる際にも、均等にすべての部分にわたることはせず、その主旨と思われる部分にのみ集中することをお断わりしておく。

「神について」という表題の第1章は、「真理 (la vérité)」(4)を知ることの重要性を強調することではじまる。そして「真理」は「理性 (la raison)」

(6) を働かすことによって得られる。理性がきちんと働いていて、それで「真理」が発見されないなどということはありません、というほど「理性」への信頼が熱く語られている。ではなぜ「真理」が発見されず、民衆は「誤った観念」にどっぷりつかったままなのか。それが問題なのである。「神」、「魂」、「精霊」といった「宗教」を構成するほとんどすべての対象について、人々は「誤った観念」を持っているが、その唯一の源が「無知 (l'ignorance)」(4, 16) なのである。そしてこの「無知」の状態に人々をとどめおくことによって利益を得ているのが例の「詐欺師たち」に他ならない。彼らは「ボン・サンスの不倶戴天の敵 (ennemi)」(8) であり、民衆が「目を覚ます (désabuser)」(6) ことを何より恐れ、「理性」がもたらすであろう成果をできる限り隠し、反対に「理性」に対する嫌悪や反発などを吹きこんだりする。もともと民衆は自分で「考える」よりも、習慣に身をゆだねたり、生まれつきの偏見に甘んじたりしがちなものである。従って「神」について自分たちが持っている観念が間違っている、それに気づかない。そこに「詐欺師たち」はつけこむのである。難しいことを考えなくても、ほんの少し「ボン・サンス」を働かせるだけで「神は普通想像されているようなものでは決してない」(8) という「真理」が確信できる筈なのに、それがうまくいかないのは「知」をうまく利用した彼らの妨害策が効を奏しているからなのだ。人々は預言者や使徒などが、普通の人間とは全く別の存在、特別の能力や学識を持っていると安易に信じてしまうが、そう信じる理由など何もないのである。井戸の底から神のお告げが聞こえる等という良く使われるトリックなどただのペテンにすぎない。彼らとて「人間によって作り出され、女から生まれ、我々と同じ仕方で生を維持する」(10) 点では我々と何も変わらないのである。「自分は神に選ばれた者だ」、「自分は神と直接話ができる」といったホラ話を厚かましく主張する者が指導者になることが多いが、彼らの言動の矛盾を見抜く能力さえあれば、その主張のいかがわしさなどすぐわかるはずなのである。せっかく与えられた「理性」という「強み (avantage)」(4) があるのに、自分で探究する能力がないとか、そんなことに骨を折ることを望まないといった消極的な理由でそれを使う人がわずかし

かないというのが残念ながら現実なのである。そこに「詐欺師たち」につけこまれる隙がある。「今日我々のもとで猖獗をきわめている詐欺や誤謬への信仰を生み出したのは無知なのだ。」(16) 隷属状態や不条理のうちで育てられた民衆が迷信にとらわれたり、夢想到没入したりしがちなことはわからないではないが、結局、嘘を軽々しく信じさせるのは「無知」なのだ、ということに気づかねばならないのである。

第2章は「どうして人間は神を目に見えない存在として思い描くようになるのか」という理由の考察にあてられている。自然の原因がわからない人々は自然に対して「恐怖 (crainte) (18) をいだく。それは自然が害を与えるものなのか、自分たちを守ってくれるものなのかかわからないという不安や疑いから出てくる。従って逆境にあっては、加護を訴える「目に見えない原因」を考え出すし、うまく事ははこんでいる場合には、それを賞賛する。結局人間は自分で神を「作りあげる (faire) (18) ののである。諸々の宗教の源泉は「この目に見えない力への想像上の恐れ」なのである。民衆は宗教によって、つまり「未来への恐怖」(20) によって盲目的服従へと追いこまれるのである。こうして人間は「神々は人間に似ており、人間と同様あらゆることを何らかの目的のためにするのだ」と信じるようになる。そして「神は人間のためにだけすべてを創ったのであり、逆に人間は神のためだけに創られたのだ」という「偏見 (préjugé)」を信じるようになる。(§ 2) 人間の「作りあげる」神は人間にとって都合のいい存在として想像され、人間と同じような感情を抱きやすいものとされてしまう。そして神は「全自然を利用して、自分自身の欲望に奉仕させようとするのだ」(22) と考えるに至る。同時に世の中にある無数の災いや害悪についても、それを「天の怒り (la colère céleste)」に帰し、「神が人間の罪に対して怒っているのだ」(24) とする偏見²⁾を取り除くことができなくなる。「善人も悪人もいつでも同じように善いことにも悪いことにも会う」という事例を日常いくらかでも経験しているはずなのに、そこから学ぼうとしない。この「偏見」は更に一步進めて「神の裁きは不可解なものである」、「真理の認識は人間精神の力に余るものである」と信じさせるところにまで導く。こ

ういう発想はうまく説明できない原因をすべて「神の意志 (volonté de Dieu)」(28) に帰そうとする。それは実際何の説明にもなっていない。だから本当の原因を究明する必要があるのだが、それを行おうとする「真の知者 (un vrai Savant)」は却って「不信心者 (un impie)」(28) として貶される憂き目をみることになる。「すべては人間のために作られている」などという愚かな意見にとらわれた人間は、すべてを自分自身にてはめ、自分たちがそこから引き出す利益によって物の価値を判断する。それが「宗教の要点」(§7)なのである。こうして善悪も決められる。自分たちの利益になるもの、神の崇拜を重視するものを「善 (*bien*)」と名づけ、反対にそのどちらにも合わないものを「悪 (*mal*)」と名づけるのである。人々が求めるのは「すべての人間的感情を受け入れる神」であり、「罰を与え報いをする神、正義の復讐する神」(38) が求められるのである。バイブルが何か特別のもののように引き合いに出されるが、この本は「さまざまの時代に、さまざまな人々によってもたらされた断片の寄せ集め」にすぎない。バイブルは神の言葉として頼りにされるが、それが語る「善行、悪行に対する報償と罰」が「そこからまだ誰一人帰ってきたことがない来世 (l'autre vie) においてのみ」(42) 起こることである点に注意せねばならない。ペテンがばれることをこれほど巧みに隠す方法はまたなかろう。希望と恐れの間でいつも迷っている民衆はころりとこれにやられてしまうのである。

「宗教という言葉の意味、いかにして、何故かくも多くの宗教が地上に生じたのか」を題される第3章は全体の中で一番長く(42～110)、ここで例の三人について詳しい議論がなされる。教祖や宗教的指導者たちのカリスマ性を演出するインチキな手段(例えば井戸の底から神の声と称してお告げを発する。神と相談してくると称してある場所に隠れる。奇跡を行う等々)によって、特別の人物のように信じさせられている者が、トリックをとり除けば実は普通の人間と何も変らない者であり、その特別な性質なるものが作為にすぎないことを示すことに主眼がおかれている。

「宗教」という言葉が世界に出現する前は、人は「自然の法則 (la loi

naturelle)」に従うしかなかった。つまり「正しい理性 (la droite raison)」に服するしかなかった。この「本能」のみが人間を結びつける絆であったのである。ところが「恐怖」が「神々や目に見えない力」があると想像させるようになると、すぐ人々はそのための「祭壇」を建て、空しい儀式や妄想を迷信的に崇めることによって、自分を縛ってしまったのである。それは「自然」と「理性」の導きを捨て去ることに他ならない。(42) こうなると人間は「この目に見えない力」が自分たちを完全に支配しているのだと考え、それを崇め自らそれに屈従するようになる。すると「自然」の見方が全く逆転した間違ったものになってしまう。つまり「自然」はこの「目に見えない力」に従属した存在だ、「死せる一つの塊 (une masse morte)」のようなものだ、この力の命令に従ってのみ動く「奴隷 (un esclave)」のようなものなのだ、と見做すに至る。こういう誤った考え方にとらわれると、「自然」は「軽蔑」の対象でしかなくなり、それに反比例するように、想像上のものにすぎない力である神々は益々尊崇されることになる。ごく少数の「真の知者」だけがその「無知」に気づき、「真理」を知っているが、そして彼らの沈んでいる深淵から人々を救い出せる筈なのだが、多数の「詐欺を利用することによってのみ生計をたてている者たち」がその活動を巧みに妨害し邪魔する。これは一つの「病気 (mal)」なのである。(44)

こうして神々を作り出した「恐怖」はまた「宗教」をも作ったのである。人間の大部分は「無知」な者なので、「自分たちの幸、不幸の原因であるような目に見えない力があるのだ」と一たん思い込むと、その妄想を「神々」というかたちででっちあげる。その後でその本性を知ろうとして、また妄想をくりひろげる。(§ 2) 彼らはこの「目に見えない力」がどう働くのかを知りたがったが、それはうまくいかなかった。そこで「過去によって未来を判断する」という方法以外に思いつかなかった。つまり「過去を見て、同じ企てがかかってうまくいったか、まずい結果になったかに応じて、未来の善悪を占った」(46f.)のである。

このようにして「目に見えない力の帝国」がうちたてられると、人々はまる

で地上の支配者に対するのと同じように、「贈り物」とか「祈り」などのような服従と尊敬の印によって、これらの力を崇めた。こういうことが実は「犠牲をささげる僧や聖職者の生計の手段 (la subsistance) のためにのみ定められた」ものであることを我々は知らねばならない。その信仰のおかげで聖職者の団体や司祭たちは「名誉や莫大な収入」を得、自らの野心と貪欲を満足させることができたのである。抜け目のないこれらの人々は「民衆の愚かさから利益を引き出す術」を心得ており、「無知」な人々はうまい具合に彼らの罠にまんまとはめられたのである。(§ 5) だます技術における大家はたくさんいたが、中でも特別に有力な者があらわれる。それが例の三人なのである。最古のモーゼ、その後によってきてその計画のもとで働き、その法の根本は保持し、他は廃棄したイエス・キリスト、最後に舞台に立ち、両者の宗教から盗みとり、だまして自分自身の宗教を作り、そして結局両者の敵であることを宣言するに至ったマホメット。この三人については実に詳細な議論がなされているが、紙幅の関係で深入りする余裕のないのが残念である。(別稿にまつしかない。)

「感覚的心理と明白な真理」という表題を持つ第4章は、「神」をどうとらえるべきか、本質的に重要な指摘を行っており見過ごすことができない。その主張は以下のものである。「神は自然にすぎない」、あるいは「あらゆる存在者のあらゆる性質の、あらゆるエネルギーの集合 (l'assemblage) にすぎない。」「必然的に内在的原因であり、その結果と区別されるものではない。」「単一な存在あるいは無限の外延である。」従って「罰を与える (punir) ことも報いを与える (recompenser) こともできない。」し、人間の性質のように「善いとも悪いとも正しいとも慈悲深いとも嫉妬深いともいえない」のである。(112) これは、一般的に受け入れやすいようにという配慮からであろうが、細かい区分や議論の厳密さを犠牲にした大まかなものであるが、明らかにスピノザの主張を下敷きにしている。人間は通例「神」に人格や意志を帰するものだが、その迷妄に対する端的な否定が語られている。いわく神が「人間をアリやライオンや石よりも重んじているなどと考えてはならない。」神は美も醜も善も悪も完全も不完全も考えない。称賛されるとか祈られるとか求められるとかへつ

らられるといったことに気をとめるはずもない。」「人間の言動に動かされることもなく、愛も憎しみも受入れない。」要するに、神が「他の被造物より以上に人間に心を奪われる」などということはありえないのである。(114) これこそ「真理」なのである。だからこそ「天国」とか「地獄」とか「靈魂」とか「悪魔」などという大げさな言葉はすべて、「民衆を眩惑させたり、怯えさせるためにのみ作り出された」ものであり、自分の理性をよく用いることのできる人なら決して信じることのできないものなのである。人間の頭が考えることだから、「神」が人間化されるのは当然だが、それが絵空事にすぎないとその正体を暴露することは、「人格神」という虚構の上に平安な社会秩序が保たれているとする、支配構造を支える偽りの「神話」に公然と異を唱えることになる。そんな「夢想」のうちにまどろむことを好む民衆の目をさまさせるべく、「汎神論」こそが「真理」だと語れば、そんな公序良俗に反する危険思想を野放しにしておいてはならないと恰好の迫害対象になることは避けられない。「汎神論」という武器を用いることは、命がけの企てにならざるをえないのである。「汎神論」は「無神論」に極めて近い考え方だからである。

「魂について」と題される第5章は様々な哲学者たちの説をいろいろ紹介、吟味することにあてられている。それぞれ興味深いそれらの議論は、整理してみると、二つの立場に分けられるとされる。つまり魂を「物的 (corporelle)」と考える立場と「非物的 (incorporelle)」とする立場である。(118) 後者は「非物質的 (immatérielle)」(124)とも表現されている。後者の立場として、ピタゴラス、プラトン、アリストテレス等があげられているが、自己矛盾しており、信じるに値しないと斥けられている。前者の立場として、ディオゲネス、レオキッポス、ヒポクラテス、エンペドクレス、エピクロス等々があげられており、最後に「魂は物質的なものではない」とするデカルトの説を槍玉にあげ、最もまずい下手くそなやり方とこき下ろし、「くだらぬ推論」(126)として一蹴している。ここでは「確かなこと」として示されている以下の考え方が大事である。

宇宙には非常に微細な流動体あるいはその源が太陽のうちにある非常にこ

まかい、常に運動している「物質 (une matiere)」がある。その他のものは多少ともその本性や堅さに応じて、他の物体 (corps) のうちに散らばっている。これが「世界の魂 (l'ame du monde)」であり、それが世界を制御し、それに生命を与えている。その分け前は世界を構成するすべての部分に配分されている。この魂は宇宙に存在する「最も純粋な火 (le feu plus pur)」である。……結局物体のうちにとじこめられているこの火が物体に感じることを可能ならしめる。これが「魂」と呼ばれたり、「動物靈魂 (les esprits animaux)」と呼ばれたりするもので、これが物体のすべての部分に広く散らばっているのである。この魂はすべての動物において同じ性質のものであり、動物の死の場合と同様、人間の死においても消えうせる (se dissiper) ものであることは確かである。だから詩人や神学者が「あの世 (来世) (l'autre monde)」について語っていることは、……すべて「妄想 (une chimere)」なのである。

最終第6章の表題は「デーモンと名づけられる靈魂」である。デーモンが人間特有の想像力のうちにのみある幻影であることは自明である。福音書などで「悪霊 (Diable)」「サタン」「地獄」といった言葉によく出くわすが、これほど空想的なものもあまりあるまい。ここでは「悪魔」という概念が含んでいる矛盾を明確に指摘している箇所だけあげておこう。神が万物を創り、保持するとするなら、悪魔あるいはサタンも神の創造物であることを否定することはできない。それが存在しているのは「神の意志」による以外にはありえないのである。悪魔が「神を死ぬほど憎み、たえず呪うだけでなく、神を苦しめて楽しむために、神の友たるべき人間を神から離反させようと努めるような被造物」(138)であるとすれば、なぜ神はこんなものを保持し、養い、そのまましたい放題させておくのであろうか。神が全能だとすれば、なぜ悪魔は神に反抗することができるのか。神はそのことに同意しているのか、同意していないのかいずれかでしかない。もし同意しているのだとすれば、悪魔は神の欲することしかなしえないから、神を呪うことで自分の義務を忠実に果しているだけということになる。すると呪っているのは悪魔ではなく、神自身だということになりはしないか。そんな馬鹿げたことがあるだろうか。しかし反対にもし同意し

ていないとするなら、神が全能であることは真ではないということになってしまう。悪魔をやっつけたいのにやっつけられないのなら、「全能」の看板をおろすしかないからである。どちらにしてもおかしいことだけは確かだ。神も悪魔もパラダイスも地獄も魂も、「宗教」が描いているようなものでないことだけははっきりしている。

最後に語られているのは次のことである。「世界がこれらの馬鹿げた考えに感染 (infecter) してから久しい。しかしいつの時代にもしっかりした精神の持主、真摯な人間はいた。彼らは迫害にもかかわらず、時代の不正義や不合理に対して抗議の叫び声をあげた。真理を愛する者はそこに疑いもなく何らかの慰め (consolation) を見いだすであろう。³⁾」(140) この言葉は我々を励ますというよりも、むしろ課題解決の途方もない困難さを意識させ、我々の心を重苦しくせずにはいない。「知」がしかも本物ではない「知」が支配の手段として機能していることは今も変わらない。とすれば我々は「歴史は所詮愚かなことのくり返しにすぎないのではないか」という問の前に立たされていることになる。「人間は少しでも賢くなったのか」「我々は今でも歴史の進歩を信じるのか」という肯定的に答えたいのに容易にそうできない間に悩まされざるをえないのである。

註

- 1) テキストは ANONYMUS : *Traité des trois imposteurs*, *Traktat über die drei Betrüger* (philosophische Bibliothek ; Bd. 452. Felix Meiner Verlag, Hamburg 1992) 仏独対訳本を使用する。「詐欺師」と訳した imposteur は「山師」でも「ペテン師」でもかまわない。三人の詐欺師とはモーゼ、イエス・キリスト、マホメットのことである。それだけでもこの文書が公に出まわるわけにはいかず、密かに回し読みされるしかない代物であったことがよくわかる。こんな文書は持っているだけでも命の保証がないほど危険なものであったことは想像に難くない。実際はその著者だと誤って考えられて火刑に処された者もいるといわれる。こういうものを密かに読みついできたのは一般人ではなく知識人だったのであろうが、よくこんなものが残ったものである。異端審問や魔女狩りなどのおぞましい蛮行を平気で行うような権力体制としてのキリスト教会が猛威をふるっている世界で、どんなに権力に脅されても、おかしいものはおかしいと異議申し立てを行う勇気を失わなかった者がたとえ小数でもいたことに感動をおぼえずにはいられない。
- 2) 「自然が何らかの目的をもくろむことはない」、「目的原因 (究極原因) はすべて人間の

フィクションである」というのがここでの基本テーゼである。(26) 人間には、特に「無知な者」には、原因のわからないことを「神の意志」に帰して安心しようとする傾向がある。それを示す傑作な例をあげておこう。それは、ある建物からはがれ落ちた石が下を通るある人に当り死なせた、という事例である。ここで「無知な者」はこう主張するにちがいない。「この石は人間を殺すという構想のもとに落ちてきた。そのことは神がそれを欲したからこそ起りえたのだ」と。彼らに対して「この気の毒な不幸者が通りかかった時に、この落下を引きおこしたのは風なのだ」と答えるとすれば、彼らはただちに「なぜこの人は風がこの石をゆるがす丁度その瞬間に通りかかったのか」と尋ねるだろう。彼らに「この人は彼を招待していた友達のところでは、食事をしていくところだった」と答えれば、「なぜこの友達は、別の時ではなく、まさにこの時に彼を招待したのか」知りたがる。彼らは要するにこの石の落下が「神の意志」によるのだと認めさせたくて、奇妙な質問を際限なくくりかえすのである。これは「神の意志」が「無知な者の避難所 (l'azile)」(28) であることを雄弁に物語っている。

- 3) 『三人の詐欺師たち』の邦訳が既に出ていることに遅まきながら気づいた。野沢協監訳『啓蒙の地下文書 I』(法政大学出版局, 2008年) である。本稿脱稿後であったので全く利用できなかったのは残念である。

(奈良県立医科大学名誉教授・哲学)